藤原宮朝堂院の調査（飛鳥藤原第120次）

大和三山に抱かれた藤原宮内で、4月末から発掘調査を本格的に実施しています。調査地は政務や儀式、饗宴の場であった朝堂院地区の東側にあたります。朝堂院東第二堂と呼ばれる建物の北半部と、朝堂院を構成する東面回廊の構造を検証するのが、今回の調査の主な目的です。実は、藤原宮は古文化研究所によって戦前に発掘されています。しかしそれは部分的な発掘にとどまったため、建物構造の詳細は不明なままでした。また、近年の調査成果に照らし合わせるとき、古文化研究所の見解には再検討を要する点がいくつかあります。

今回の調査面積は約1100㎡。機械掘削ののち、西から東へ向けて調査を開始しました。スコップを入れ、土をけずると、東西、南北にのびる無数の溝が現れてきます。調査員の間で「ミゾミゾ」と呼んでいる中世以降の耕作溝です。遺構カードに図面を記録し、掘り下げていきました。この作業を一カ月近く繰り返し、ようやく調査区の東端にたどりついたところです。

発掘状況を振り返ってみると、瓦がたいへん多く出土したという実感を強くもちます。瓦葺きの建物があったことは間違いないでしょう。建物の柱を支える礎石は失われていましたが、礎石を据えるための根固めの石は、わずかですが顔をだしています。そのほか建物の存在を示す痕跡も確認しています。しかし詳細はこれからの折り返し調査にかかっており、担当者は気合いを入れ直しているところです。

耕作溝と東第二堂の礎石根石（北から）

山田道の調査（飛鳥藤原第121次）

橿原神宮東口から雷の交差点、飛鳥資料館前を通り桜井市へと延びる県道の改良工事にともなう発掘調査です。この工事にともなう調査は、1988年度以来、今回で9次目になります。今回の調査地は、農免道路との交差点から西へ約20～80mの間にあり、県道の北側に位置します。

小規模なトレンチを計4カ所設定し、西端のⅠ区から着手しました。Ⅰ区はおよそ13m四方の広さがあります。地表面から1.5mほど下がったところで、調査区全体に粘土の堆積土が広がり、西南隅にほんの少し当時の地表面がのぞくだけで、山田道に関わる遺構はⅠ区では発見できませんでした。

古墳～飛鳥時代の遺物が多く含まれている粘土層は、当時ここが沼地であったことをうかがわせます。さらにこれを掘り下げたところ、深さは地表面から3m近くとなり、底部に到達したところで弥生時代の流路1条を確認しました。この流路からは土器片や完形の壺1個体が出土し、付近に集落があることを示しています。

山田道関連の遺構検出を期待しつつ、順次、東へと調査区を移す予定です。（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

弥生時代の流路（北から）

特別史跡キトラ古墳　墓道部の調査

キトラ古墳は、高松塚古墳に次いで発見された飛鳥の終末期壁画古墳です。1983年の壁画発見以来、数度の調査を経て数々の発見がありましたが、それとともに壁画自体が相当危険な保存状態にあることもわかってきました。そこで、今後の保存処置をみすえ、文化庁文化財部記念物課の委託を受け、墓道部約15㎡を発掘調査しました。調査には、奈良県教育委員会（奈良県立橿原考古学研究所）と明日香村教育委員会、そして地元の協力をえました。

調査は、東西4m×東側南北5m・西側南北3mの調査区を設定しました。横口式石槨南壁までは約1.3mを隔てています。発掘調査の結果、盗掘坑と

キトラ古墳全景（南から）

現地での測量風景

墓道を確認しました。盗掘坑の規模は、調査区北壁で東西幅約３ｍ、深さ1.5ｍが、出土しました。

横口式石槨の南に位置する墓道は、古墳の墳丘盛土から掘り込まれ、幅約2.5ｍ、調査区北辺での深さは1.5ｍ。東側で3.5ｍの長さが残っていました。墓道の床面は、最も高い北側0.3ｍだけがほぼ水平で、それから南側は緩く南に傾斜します。墓道の下部は、堅い版築土で埋められていました。墓道の床面には、南北方向のコロのレール痕跡がみつかりました。埋土から土器片が出土しましたが時期は特定できません。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

中国社会科学院考古研究所との共同研究（唐長安城の太液池の調査）

昨年８月、新たな５年間の共同研究に調印して以来、研究員交流や秋期事前調査を経て本年４月10日より４月28日までの18日間、奈文研から４名の調査員を派遣しました。調査対象地は、中国西安市内の唐長安城東北部分にあたる大明宮の太液池です。ちょうど池の西岸に当たる場所を昨秋の事前調査に引き続き、調査面積を拡張して東西約95m南北約47ｍの約4500㎡を調査しています。

今回は、昨秋の調査時に設置した測量基準点を使用して、中国国内座標に合わせて測量、現地の技師とともに精密な図面を作成する作業をおこないました。また、詳細な記録をとるため４×５インチ判のカメラを使用した遺構写真撮影も同時におこないました。

現地ではちょうど春先の黄砂現象がピークに達しており、調査員一同ほぼ毎日吹き荒れる砂嵐との戦いを余儀なくされ、調査終了時にはほとんど現地の方と見分けがつかなくなるほど中国の風土にとけ込んでいました。調査後半には町田章所長をはじめとする一行が、北京の研究所を経て視察に赴き、今後の調査に関する打ち合わせなどをおこないました。

（平城宮跡発掘調査部）

文化財関係研修の実施

発掘技術者研修「保存科学課程」

今年度の「保存科学課程」は、５月21日から６月５日まで実施し研修生は10名と例年に比べ少ない人数でしたが、少人数ゆえに密度の濃い研修をおこなうことができました。現場での応急処置、一時保管、事前調査、保存処理、保管・展示など遺物を保存するにあたって重要となる内容について講義、実験、実習をおこないました。２週間という短い期間では、様々な遺物の保存についての知識と技術をマスターすることはなかなか難しいことですが、基本的なことをひと通りこなすことで、保存科学に対する理解が深まったようです。

研修生の中には、今後保存処理担当者として実際に取り組んでいかなければならない方もいれば、発